

会長就任のご挨拶

谷口 文章(甲南大学)



1985年の日本保健医療行動科学会の設立以来、今年で本学会も23年を迎えました。本学会は、初代会長の故中川米造先生のあたたかい眼差しと保健医療をめ

ぐる各界におけるフロンティアとして、「保健医療の行動科学」を推進しながら、学問の理論と臨床の実践をつなぐ学会でありました。

具体的にふりかえってみますと、健康と病気の行動科学のテーマから、QOL、自己決定、セルフケア、ヘルスプロモーション、ノーマライゼーション、医療倫理、ターミナルケア、グリーフケア、すこやかな生、全人的医療、ナラティブ、医療の不確実性など、保健医療をめぐる問題群に関する行動科学のフロンティアとして、研究・実践の分野に社会的使命と役割を果たしてきました。

この間、社会情勢も変化し、現在では健康と医療の山積する課題、それに対応する社会制度や政策も先行き不透明な状況にあります。その意味で、一つのことが解決すると、また新たな問題が噴出してくる現状にあります。このような混沌の中、ふと思えますのは、中川先生がもしおられたら、つまり中川先生の「時代を見通す力」が現在の本学会にあれば、カオスの保健医療界に一石を投じられるであろう、と感ずることがあります。

しかしながら、このような回顧的な想いや自省のみでは、学会の運営はできません。今まで、研究発表、体験ワークショップ、シンポジウム、中川記念奨励賞、認定健康行動科学士資格研修などによって、会員同士の研究の切磋琢磨や若い世代の教育・養成が推進されてきましたが、それらの仕事に加えて、近い将来、現実の保健医療の諸課題に対応できるような指針や医療政策に対する提案、地震

や台風などによる被災者の支援活動などについての検討も必要であると思われます。さらに、医療倫理、インフォームド・コンセント、自己決定などの諸概念の定着後の問題や、社会状況に応じた医療ケアについても、現実に十分そぐわない諸課題については再検討していく必要があるでしょう。一つの特異な問題を一般化していく際の方法について考えてみましょう。保健、医療、看護、介護の営みに対して新しいキーワードを使うことによって、たとえば生命・医療倫理学の既存の定着しつつある、しかし現実に適合していない概念をこえて、次のように敷衍することができるでしょう。そのキーワードとして、来年度の全国大会のテーマであります「ケア」の観点を導入してみますと、「すこやかな生」をめぐる、患者や高齢者という「ケアされる人」と医師、看護師、介護士という「ケアする人」との関係だけでなく、その「ケアが実現できる基盤」である家族、地域社会、そして政策や経済、また伝統文化までも視野に入れることになるでしょう。こうして、どのような特殊な視点であれ、新しいキーワードによってそれを深めると普遍性へとつながることが理解できます。これからの学会活動はこのような更新し続ける一般化の方法も必要となるでしょう。

これらの統合的な方法論は今後の課題でもありますが、今しばらくは保健医療をめぐる現場の臨床環境とすこやかな生をトータルな視点から研究ならびに実践していき、行動科学を軸としながら「対話による合意形成」の場を学会全体として、創生していくことを目指したいと思います。

まず、『保健医療行動科学事典』(1999年)の改訂出版、国際会議の開催とともに海外から新たな顧問や研究者を招聘し学会の国際化をすすめるとともに、若手研究者の積極的な養成などを具体化したく存じます。会員の皆様の心からのご支援ご協力をお願い申し上げます。